

生活の再構築に関する考察

－山古志地区を事例とした中山間地居住に関する研究－

プロジェクト2 研究員
東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科 准教授
水村 容子

1. はじめに

1.1 研究の目的と方向性

中山間地域には、我が国の全耕地の40%が分布し、全人口の約1/7が生活している。しかしながら、中山間地域の農林業は衰退し、人口の減少および高齢化が顕著な状況が続き、コミュニティも崩壊しつつある。こうした「限界集落」とも称される中山間地の現状打開に対する一般解を提示することは困難ではあるが、本研究では、中越大震災の被災地である、新潟県長岡市山古志地区の復興計画および住民による生活の再構築のプロセスに着目し、中山間地の振興に資する住環境づくりの方向性を検討する。特に、震災後、中山間地である山古志へ戻り生活を再開した者と、移居しながらも山古志との繋がりを保ちつつ生活を再構築している者との焦点を当てて、山古志での居住継続に関する要因を抽出することを本研究の目的とする。

1.2 研究の方法

本研究報告は以下の2つの調査から構成される。

1) 仮設住宅生活終了後山古志地区へ戻った世帯 に対するヒアリング調査

2007年9月および2008年5月に、山古志支所を通じて調査依頼を受け入れてくださった6世帯へのヒアリン

グ調査を実施した。調査内容は、①世帯の属性、②現住宅について、③親類・近隣の人との交流について、④被災前の住宅の状況、⑤現在の住生活について、⑥外出行動・コミュニティへの参加状況について、⑦福祉サービスの利用状況について、などによって構成される。

2) 仮設住宅生活終了後山古志地区外へ移居した世帯 に対するヒアリング調査

2008年7月に、山古志支所を通じて調査依頼を受け入れてくださった4世帯へヒアリング調査を実施した。調査内容は、①世帯の属性、②現住宅について、③親類・近隣の人との交流について、④被災前の住宅の状況、⑤現在の住生活について、⑥外出行動・コミュニティへの参加状況について、⑦冬の過ごし方、⑧福祉サービスの利用状況について、などによって構成される。

1.3 ヒアリング調査結果分析のスタンス

本研究では環境移行の観点から、ヒアリング調査対象の生活状況を分析する。本研究対象は、上述した通り「中越大震災」という自然災害をきっかけとして、生活の再構築を強いられた人々であるが、その再構築の過程での様々な取捨選択のもと、最終的な居住の場を選び取った者でもある。三浦は、「自然災害に伴う環境移行は、災害、個人（心、からだ）、環境（住まい、

コミュニティ、社会等)の三つの相互が重なり合う円として表すことができる」(図1参照)と指摘している^{文1)}。

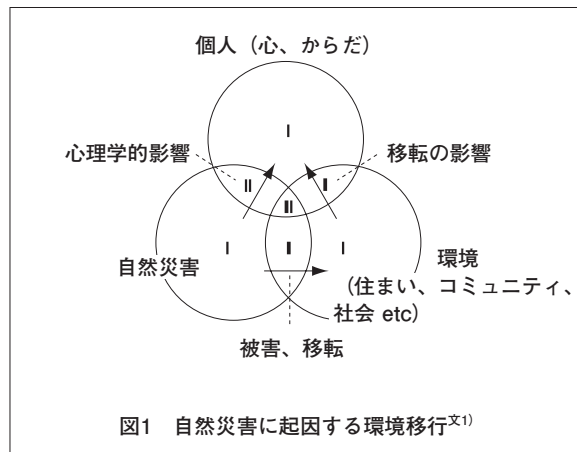


図1 自然災害に起因する環境移行^{文1)}

本研究では、自然災害が契機となり生活の基盤の再構築を求められた事例をとりあげているが、そのプロセスにおいて求められた条件とは、一般の中山間地居住者にも共通した必要条件であると考えられる。そこで、ヒアリング調査結果の分析にあたり、生活の基盤、すなわち「環境」を次の通りに定義づけ、調査対象者の被災前および現在の生活環境の枠組みを構造的に把握することにより、生活の必要条件を抽出・整理する。

- ・ 物的環境：住宅・住生活および居住する地域の道路・公共交通機関・移動手段などのインフラストラクチャー
- ・ 人的環境：家族関係、親戚縁者との関係、近隣住民との付き合い
- ・ 社会的環境：就学・就労状況、医療・福祉などの社会サービスの利用
- ・ 経済的環境：世帯の収入、経済力、住宅再建時の補償

2. 山古志地区へ戻った世帯に対するヒアリング調査の結果

2.1 調査対象世帯の属性

調査対象6世帯の属性は表1に示した通りである。世帯人員数が5名以上が3世帯、2～3名が3世帯である。現在の住宅は、5世帯が所有、1世帯は公営住宅へ入居する予定である。住宅の再建状況は、耐震改修済みが2件、未改修が2件、新築の復興モデル住宅が、持家と公営住宅でそれぞれ1件ずつである。被災の状況は、「全壊」が2件、「半壊」が3件、「一部損壊」が1件である。以下、それぞれの世帯の山古志地区へ戻ってからの生活状況を報告する。

表1 調査対象世帯の属性（現山古志地区居住者）

ケースNo	No.Y-1	No.Y-2	No.Y-3	No.Y-4	No.Y-5	No.Y-6
世帯人数	7人	8人	3人	6人	3人	2人
現住宅へ戻った時期	H18.4月	H18.8月	H18.9月	?	H18.12月	H19.11月
住宅の所有状況	所有	所有	所有	所有	所有	公営住宅
住宅の構造	木造戸建	木造戸建	木造戸建	木造戸建	木造戸建	木造戸建
再建の状況	改修	改修	未改修	未改修	新築の復興モデル住宅	新築の復興モデル住宅
被災状況	一部損壊	半壊	半壊	半壊	全壊	全壊
保険の加入状況	JA建更	JA建更	JA建更	JA建更	JA建更	加入なし
被災前住宅の所有状況	所有	所有	所有	所有	所有	所有
被災前住宅の構造	木造戸建	木造戸建	木造戸建	木造戸建	木造戸建	木造戸建
被災前住宅の部屋数	6部屋+居間 食堂・台所・浴室・便所+納戸	6部屋+居間 食堂・台所・浴室・便所	4部屋+居間 食堂・台所・浴室・便所 (診療所併用)	7部屋+居間 食堂・台所・浴室・便所	8部屋+食堂・台所・浴室・便所	7部屋+食堂・台所・浴室・便所

2.2 調査対象世帯の生活状況

1) ケースNo.Y-1さんの世帯

Y-1さん世帯の生活状況は表2に示した通りである。住宅の被害は「一部損壊」と比較的軽いものであり、部分的な改修によって居住の継続が実現している。家族構成は被災前後で変化は無く、近隣の人とも以前通りの付き合いが続いている。就労状況、経済状況にも特に大きな変化は無い。震災前後で大きく変化した点は、孫の長岡市内への高校への通学方法および、居住する種芋原地区の商店の閉店である。震災を期に山古志地区内の路線バスが廃止されてしまったため、孫は連日、自宅からコミュニティバスで山古志地区支所へ向かい、支所から他の高校生とタクシーを乗り合い直近のバス停（大田口）で降り、路線バスに乗り継い

で高校へ通学している。帰路は、長岡市内に勤務している父親か母親に自家用車で市内まで向かえに来てもらう生活である。また、種苧原地区では、地域内唯一の商店が閉店してしまったため、連日移動販売車が巡回している。

2) ケースNo.Y-2さんの世帯

Y-2さん世帯の生活状況は表3に示した通りである。住宅の被害は「半壊」と診断され、玄関先および居室内の床がゆがむ、壁は落ちるなどの被害を受けた。これらの被害は概ね改修によって復元されたが、玄関先に生じてしまった段差だけは改修できておらず、世帯主の母の転倒の原因になるのではと杞憂されていた。被災前と現在の生活とで大きく変化した点は次の通りである。被災前、世帯主は山古志地区内の職場(養鯉組合)で就労していたが、震災後この職場は閉鎖となり、長岡市内の土建会社に転職した。調査時点、毎日自家用車で長岡市内に通勤していた。また、表中には、記載されていないが、世帯主の母が、被災・仮設住宅生活の開始に辺り、体調を崩し寝たきりの生活状況が続いていた。しかしながら、山古志地区に戻り畑仕事を再会した頃から体調が復調し、現在では、連日シルバーカーを押して、徒歩20分ほどの畑に通い1時間ほど農作業をしている。その一方、この母親が懇意にしていた近隣の人が山古志から転居してしまったため、日常的な友人との付き合いが減ってしまった。そのため、最近では、社会福祉協議会が開催する「いきいき会」に月1回であるが参加している。

3) ケースNo.Y-3さんの世帯

Y-3さん世帯の生活状況は表4に示した通りである。築100年以上経過している自宅であるが、震災では「半壊」の被害を受けた。地震により家が大きく傾いたため、住宅の再建にあたり主に耐震改修を行っている。世帯主は山古志地区内唯一の医師であり、地元住民からの信頼も厚く、被災前後で人的環境や経済環境に大きな変化は見受けられない。しかしながら、

山古志地区へ戻った直後から、世帯主は多忙を極め、それと同時に震災をきっかけとして同居している母親が体調を崩し要介護4の認定を受けたが、その介護に当たっている妻も体調を崩しつつある。また、居住する虫亀地区内は、以前商店が3箇所あったが、自宅直近の2件が閉店してしまい、地区内に唯一残った「小林商店」が長岡市内で買物をしている。

4) ケースNo.Y-4さんの世帯

Y-4さん世帯の生活状況は表5に示した通りである。世帯主は山古志地区竹沢で工務店を営んでおり、自宅が「半壊」の被害を受けたにも関わらず、調査時点で自宅改修に着手せず地域住民の家の新築にあっていた。震災前後で生活に大きな変化は見受けられないが、住宅のある竹沢地区の住民が転出してしまったことによって、従来行われていた祭りなど伝統行事が運営されない事態となっていた。元来「となり組」が上手く機能し、高齢者の独居居住を支えてきた地域であったが、そうした従来のコミュニティが機能しない状況となり、新たな「となり組」を構築する必要性に直面していた。

5) ケースNo.Y-5さんの世帯

Y-5さん世帯の生活状況は表6に示した通りである。自宅および養鯉池が「全壊」の被害を受け、生活の抜本的な見直しが強いられた。まず、生業である養鯉業は作業が身体的に厳しくなっていることおよび後継者の不在を理由として廃業した。さらに、住宅の再建にあたっては、安価に再建できることと建設を急ぐなどの理由から、復興モデル住宅^{文2)}に設計変更を加えた。しかしながら、結果的に建設にかかった資金^{注1)}および施工内容に大きな不満を抱えている状況である(詳細には表3-2-5を参照)。施工内容に関しては、「吹き抜けは暖房効率が悪い」「(本来安価に建設するために用いられた建材に対して)造作や材料が悪い」などの不満を抱えており、事前に復興モデル住宅の設計意図が伝わっていなかった状況が読み取れる。一方、

表2 No.Y-1さん世帯の生活状況

(インタビュー回答者:世帯主、79歳、男性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	・在来木造の住宅(所有)に7人家族で居住 ・現在の住宅は昭和51年築	・孫は3人おり、一番年上の孫は震災前、路線バスで長岡市内の高校に通っていた。 ・震災前、居住する種草原地区に商店があった。	・世帯主夫婦、長男夫婦と孫3人の7人家族である。 ・長男は長岡市内に通勤。 ・世帯主には、夕方相模などみなから酒を交わす友人がいる。この仲間とゲートボールもやっている。	・歯科などの通院は長岡市内まで通っている。始発のバスで通院。 ・世帯主は以前体調を崩し、長岡の日赤病院へ入院した経験あり。	・世帯主:農業に従事し、冬期は愛知県や群馬県に出稼ぎに行っていたが、現在は隠居。 ・長男は長岡市内に勤務している。
現在	住宅の被災状況:一部損壊 ・被災による住宅の損傷状況:浴室のタイルがはかれる、壁が落ちる、戸が開かなくなる ・柱・壁量が多いため地震の被害が少ない模様。 ・震災後の改修の状況:床の張替え、台所の改修(山古志の大工へ依頼)	・高校生の孫は、震災後、高校への通学は自宅からコミュニティバスで山古志支所へ向かい、支所から他の高校生とタクシーの乗り合いで大田口まで行き、その後路線バスに乗り換え通学している。帰路は、両親のどちらかと長岡市内で落ち合い帰宅する(路線バスは復旧せず)。 ・地区内の商店は再開せず、買物は息子や嫁に長岡へ車で連れて行ってもらった。 ・商店が閉鎖し毎日移動販売車が巡回。	・仮設住宅から平成18年4月に戻った以降、近隣の人は以前通りの付き合いである。	・長岡市内への医療機関への通院は、家族に車で送ってもらった。	・農協の建物更生共済に加入しており、住宅の損傷に対して補償金が給付された。

表3 No.Y-2さん世帯の生活状況

(インタビュー回答者:世帯主の妻、53歳、女性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	・在来木造の住宅(所有)に8人家族で居住 ・現在の家は、昭和48~49年頃に建設されたものである。以前の家(茅葺きの民家)が老朽化したため、平成元年にこの家に移り住んだ。	・世帯主は山古志地区内の職場に通勤。 ・長男、長男の妻は長岡市内へ車で通勤、三男は小千谷市内に通勤している。いずれも自動車通勤。 ・長男の子供2人は、山古志地区沢沢にある保育園へ通園。送迎バスあり。 ・世帯主の母(調査時83歳)は、診療所など近所への外出は杖を用い、畑仕事に行く際には、シルバーカーを利用して移動していた。 ・虫亀地区内には商店がある。	・家族構成は次の通り、世帯主夫婦、世帯主の母、長男夫婦、長男の子供2人、三男。 ・次男は新潟市内に住居。 ・頼りになる親類は、山古志に在住している世帯主の妹夫婦および妻の実家。 ・近隣の虫亀地区の住民とは、道端で会話を交わしたり、雨天時など誰かの家でお茶を飲みながらおしゃべりする仲である。 ・世帯主の母にも、お茶を飲みおしゃべりする友人がいた。 ・山古志地区では親しい隣人を「アタリキンジョ」と称する。	・世帯主:山古志地区内に勤務 ・長男:長岡市内に勤務 ・長男の妻:長岡市内に勤務 ・三男:小千谷市内に勤務 ・長男の妻が仕事をしていたため、山古志地区内の保育園を利用 ・世帯主の母は、週1回診療所に通院する程度。介護などの福祉サービスは利用せず。	・世帯主:山古志地区内の錦鯉組合に勤務 ・長男:長岡市内で整備士として勤務 ・長男の妻:長岡市内で看護師として勤務 ・三男:小千谷市内で鉄筋工として勤務
現在	住宅の被災状況:半壊 被災による住宅の損傷状況 ・浴室:壁が落ちた。 ・台所・食室:床部分が損傷。 ・便所:15cmほど床レベルが沈んだ。 ・玄関:壁が落ち、玄関先の地盤が沈み、玄関から出たところに段差が生じる。 ・洗面所:洗面台が壊れた ・2階居室:床がゆがんだ。 震災後の改修の状況 ・浴室:壁を補強、浴槽を和式浴槽から和洋折衷式浴槽へ交換。 ・台所:流し台を交換。 ・便所:床を水平に補修。 ・玄関:壁の補修、下駄箱などのポリウムを減らし、土間の面積を広げる。 ・洗面所:洗面台を新しいものに交換。 ・2階居室:8畳および6畳の床を畳からフローリングに交換 ・耐震補強:筋交いを住宅全体で7箇所に入れた(大3箇所、小4箇所)	・大人の通勤状況は変わらず、車で長岡・小千谷市内へ通勤。 ・長男の子供2人は、山古志地区沢沢にある保育園へ通園。送迎バスあり。 ・世帯主の母、仮設住宅居住時、体調を崩して寝たきりの状態になっていたが、山古志へ戻ってから、畑仕事を再開し、元気を取り戻した。 ・畑までは、以前と変わらず20~30分程度、シルバーカーを押して徒歩で通っている。畑仕事は1時間程度行う。 ・虫亀地区の商店は存続している。食料品、衣料品などをここで買う。その他の買い物は車を運転して小千谷方面へ向かう。	・震災をきっかけとして、頼りにしていた妹夫婦が長岡へ転居してしまっ ・遠方に暮らす親類(世帯主の兄弟など)も、震災後、遠慮してかあまり来なくなった。 ・虫亀地区の人とは以前と変わらない付き合いが継続している。 ・世帯主の母は、仲の良い友人が山古志から転居したため近所付き合いが減った。 ・世帯主の母は、月1回程度、虫亀地区で開催される「いきいき会」に参加するようになった。お茶を飲みお菓子を食べ、おしゃべりしたりゲームをして過ごす。ボランティアの参加もあり、とても盛況。1回に20人程度集まる。費用は1回100円かかり、2時間程度開催される。	・世帯主の職場(錦鯉組合)は閉鎖となり、転職した。 ・その他の家族の就労状況は被災後も継続。 ・孫達は調査時も保育園へ通園。 ・世帯主の母は、山古志に戻ってから体調が回復し、調査時点では、以前通り、週1回程度の通院している。 ・世帯主の母の友人らが転居してしまっため、山古志地区へ戻ってから、地区内で開催される「いきいき会」を利用するようになった。	・世帯主の職場(錦鯉組合)は閉鎖となり失業したため、長岡市内の土建会社に転職した。 ・長男、長男の妻、三男、いずれも、勤務先が山古志地区外であったので、就労は継続され現在に至っている。 ・長男:長岡市内で整備士として勤務 ・長男の妻:長岡市内で看護師として勤務 ・三男:小千谷市内で鉄筋工として勤務 ・農協の建物更生共済に加入しており、住宅の損傷に対して補償金が給付された。

表4 No.Y-3さん世帯の生活状況

(インタビュー回答者:世帯主、60歳、男性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	・現在居住している住宅は、明治30年代の築100年以上経過した住宅である。 ・2階の板敷きの部屋は冬用たき置き場として利用していた。 ・代々医師の家系であり、住宅は診療所併設となっているが、診療は山古志地区の診療所で行っていた。 ・世帯主と妻、母の3人家族である。 ・調査時、長女は東京で大学に通っている。	・自宅のある虫亀地区から、山古志支所に隣接する診療所および地区内のその他2箇所の診療所まで車で通勤。 ・買い物は、虫亀地区内にある商店を利用。自宅横の店やその上2件の酒屋で買い物をしていった。	被災前後で人的環境にはほとんど変化なし。 ・山古志地区内でただ一人の医師であることから、山古志全域の人と顔見知りである。 ・世帯主の妻も、以前幼稚園に勤め、子育て支援の活動を行っていたので、山古志全員の人と顔見知りである。 ・頼りにしている親類は「アイモチ」(分家同士)、Y-3家の本家は新潟市内であるが、分家は山古志の虫亀地区内に3件、長岡市内に1件在住。分家同士の付き合いは親密であり、祝い事や法事などは共同で行う。 ・親しい近隣は「アタリキンジョ」、冠婚葬祭などを手伝ったり、非常時には助け合う仲である。近隣で特に親しいのは、下の「豆腐屋さん」。山古志では、親しい人同様に「屋号」で呼び合う。この「豆腐屋さん」には、庭の草刈りや雪下ろしなどを頼んでいる。 ・山古志地区内の住民とは、何世代も前から付き合いがあり、安心感がある。 ・しかしながら、震災後、住宅の密度が1/5程度減り、こうした近所付き合いの存続が難しい面もある。	・世帯主は山古志地区内の診療所に勤務。 ・世帯主の妻も、震災前、義母の調子が良かったときには、子育てのための「スクスク教室」などを手伝っていた。 ・世帯主の母(調査時94歳)は、若い頃山古志地区内で助産師を務めていた。85歳頃まではゲートボールを行い、震災前には母乳車を引ながら自立で歩行していた。	・山古志地区内の診療所に医師として勤める。
現在	住宅の被災状況:半壊 ・築100年以上経過している住宅であり、地震の前から少し傾いていた。 震災後の改修の状況 ・庭をついで、台所・浴室の面積を拡幅。 ・1階の患者用手洗い・男女別トイレ・幅1間の廊下を取り外した。 ・全ての壁をコンパネで補強。 ・2階は、耐震補強のため、横であった部分1ヶ所壁を入れ、補強柱を設置した。 ・1階は、居間部分のサッシ2箇所を壁とし、その他の壁に合板を入れた。 ・2階のたき置き場であるが、山古志へ戻って以降、医師としての仕事が多忙であり、この空間に生活財のほとんどを置きっぱなしにしている。	・調査時、山古志地区内の診療所3箇所に加えて、まだ居住者の残っている陽光台仮設住宅へ車で巡回していた。 ・震災後、自宅からすぐのところにある2つの商店は閉店してしまっ。現在は、虫亀地区内の小売店で買い物を行っている。 ・妻は、週1回程度、車で長岡市内、小千谷市内に買い物に行く。	・世帯主の母は被災直後肺炎で入院・危篤となって以降、要介護状態となっている。 ・調査時、要介護4の認定を受けていた。利用していたサービスは次の通り。 ・春・夏はデイサービスを利用するが、冬期は自宅で過ごす。 ・サービスの利用頻度は、訪問介護週2回、デイサービス週1回、訪問診療月1回である。 ・義母の介護のため、妻が子育て支援の活動を止め、自宅で介護している。過労のため、体調が不良(貧血気味)が悪化している。	・依然として、地区内ただ一人の医師である。 ・患者は以前と比較すると減少している。 ・農協の建物更生共済に加入しており、住宅の損傷に対して補償金が給付された。	

表5 No.Y-4さん世帯の生活状況

(インタビュー回答者:世帯主、60歳、男性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	<ul style="list-style-type: none"> ・在来木造の住宅(所有)に家族6人で暮らしている。 ・現在の住宅は昭和47年地区、平成15年頃孫が誕生し子世帯と生涯同居になり大増築を行った(基礎は手をつけず、既存の36坪部分を改修して92坪まで増築)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は自宅で工務店を経営 ・大人4名は全員運転免許・車を所有 ・長女は山古志診療所に歯科衛生士として勤務 ・長女の夫は長岡市内へ通勤 ・震災前は、竹沢地区内の商店および小千谷市内で買い物している。 ・震災前は、路線バスが山古志地区内を通過していた。この路線は旧山古志村側が500万円の負担金を負っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・竹沢地区には、「となり組」が存在する。高齢2~3件で近くに暮らす妻介護高齢者などをサポートしてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は竹沢地区の自宅で工務店経営 ・長女は山古志診療所勤務 ・長女の夫は長岡市内に勤務 ・2人の孫は自宅で世帯主の母親が見る ・車があるため、病院は長岡市内まで通院 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は、山古志竹沢地区で工務店を経営。調査時、地区内での新築工事に追われていた。 ・長女は山古志診療所勤務 ・長女の夫は、長岡市内で勤務 ・農協の建物更生共済に加入していた。建物の損傷に対して500万円の補償額であったが、家の中を片付けて直す程度の額である。
現在	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅の被災状況:半壊被災による住宅の損傷状況 ・壁に少しひびがはいる。 ・建物全体が後方に傾く。 ・工務店を営んでおり、他の住民の住宅を建設しているため、自宅の改修に手が回っていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大人4名は、山古志地区内の移動には車を利用。 ・竹沢地区内の商店が閉店したため、買い物は小千谷へ入っている。国道291号線の修復が終われば小千谷駅まで車で10分程度である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・竹沢地域の中で子供のいる若い世帯が減少した。そのため青年会も成立しなくなった。 ・祭りなどの運営が困難になったため、再度運営者を募り組織化を図った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長女夫婦は長岡市内に勤務 ・上の孫は山古志小学校へ入学、調査時小学年生 ・車があるため、病院は長岡市内まで通院 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は山古志竹沢地区で工務店を経営。調査時、地区内での新築工事に追われていた。 ・長女は山古志診療所勤務 ・長女の夫は、長岡市内で勤務 ・農協の建物更生共済に加入していた。建物の損傷に対して500万円の補償額であったが、家の中を片付けて直す程度の額である。

表6 No.Y-5さん世帯の生活状況

(インタビュー回答者:世帯主、77歳、男性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	<ul style="list-style-type: none"> ・在来木造住宅(所有)に家族3人で居住。 ・居室構成は8部屋+台所・便所・浴室、60坪ほどの建築面積であり、広くてゆとりのある良い住宅であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主と息子が車の運転免許を所持している。 ・車は世帯で2台保有している。 ・長男は車で越路へ通勤している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・親類では、本家との付き合いがある。 ・近所付き合いは回覧板程度。 ・妻には茶のみ友達がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・養鯉業を営んでいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・養鯉業による収入 ・息子の収入
現在	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅の被災状況:全壊、養鯉業を営んでいた池も全壊となった ・青葉台仮設住宅に居住していたが、新しい住宅の建設が遅れたため、一番最後まで仮設住宅に残っていた。 ・長岡市内の転居も考えたが、春・夏の過ごし方に愛着があり戻すことを決意した。 ・仮設住宅入居時に、家財を親類の車庫へ入れさせてもらったが、明け渡しを求められたため、早急に家を新築する必要が生じた。その結果、安価で早く完成する考え、復興モデル住宅を建設することにした。 ・復興モデル住宅に設計変更を加えた為、見積り額1500万円程度を大きく上回った2千80万円の建設費がかかってしまった。 ・雪への備えを重視して高床式の住宅としたが、現在膝を痛めており、階段の昇降が困難。 ・造作や材料が悪いので、現在の家にはあまり満足していない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は被災後養鯉業をたたみ、隠居生活を送っているため、外出の頻度が減った。 ・長男は車で越路へ通勤している。 ・日用品の買い物は、車で虫亀の小林商店(雑貨屋)で済ませている。 ・歯科、内科ともに山古志診療所で受診、診療所の医師が週1回、虫亀地区内の診療所に巡回している。 ・妻は車が運転できないため、長岡市内へ買い物に行く時には世帯主が運転している。 ・震災後、路線バスが復旧せずコミュニティバスが巡回しているが、本数が少ないので使い勝手が悪い。 ・将来的に車の運転が出来なくなった時の移動手段の確保が心配である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・震災後、虫亀地区においても、長岡方面に移転した人がいる。そうした人は付き合いはないが、山古志へ畑仕事に通ってきている人もおり、それらの人とは会えば会話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・震災により、自宅、養鯉池ともに全壊。高齢で作業が困難になってきていることと、後継者がいないことを理由として養鯉業は廃業してしまっ 	<ul style="list-style-type: none"> ・年金生活 ・息子の収入 ・農協の建物更生共済に加入しており補償を受けた。

表7 No.Y-6さん世帯の生活状況

(インタビュー回答者:世帯主、79歳、男性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	<ul style="list-style-type: none"> ・在来木造の住宅(所有)に家族7人で暮らしていた。 ・昭和48年築の住宅で、息子家族(妻と子供3人)との同居。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は養鯉業の関係から、小千谷等へ1日に何度も商用で往復した。そのため買い物なども担当した。 ・世帯主の妻は運転せず、移動手段は徒歩か、夫の運転であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・息子世帯と同居。 ・妹世帯も山古志在住。 ・世帯主には、夜酒を交わす友人、妻には茶のみ友達がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・山古志で養鯉業を営む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和26年から養鯉業を営む。 ・息子の収入
現在	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅の被災状況:全壊 ・建物の基礎部分は全壊 ・地震を契機として、仮設住宅入居時から息子世帯と世帯分離。 ・山古志に戻ってからは、息子世帯が家を新築し、高齢夫婦は公営住宅へ入居。 ・公営住宅と息子達の自宅との距離は、徒歩10分(直線距離で300m程度)であるが、もう少し近い方が望ましい。 ・震災復興公営住宅には、平成16年度の収入が500万円以下世帯が該当したが、16年度は養鯉業を辞めた直後で納税の結果、公営住宅の入居基準以上の収入があったため入居資格は得られなかった。 ・そこで、被災した家を建て替える日等がないので、「全壊」の家の住み続けるつもりで壊さなかったところ、行政から「壊せ」と言い渡された。行政との交渉の結果、こう得住宅への居住が認められた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現在は、移動販売車が週2回程度巡回するのを利用。買い物は主として妻が行う。 ・月に1回程度、世帯主が車を運転して、長岡・小千谷のスーパーへ買出しに行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・震災を期に、息子家族とは世帯分離。 ・妹家族も長岡市内に近い滝谷町(妙見)に移り住んだ。 ・山古志在住の友人との付き合いは変わらない。 ・滝谷町には、山古志から移住した人が多数おり、その多くが山古志市内の畑・田へ通っている。よく顔を合わせるが、その際には普通通りの世間話をする程度の付き合いは継続している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・震災により、自宅および養鯉池が全壊し、養鯉業を辞める。 ・現在は、自宅での隠居暮らし。 ・夫婦ともに体調が悪い時には山古志地区の診療所を利用。 ・妻は、前年度、長岡市内の病院で精密検査を受けたこともある。 ・診療所へは、世帯主は月1回程度、妻は週1回通院している。妻の通院時には世帯主が車で送っていく。 ・養鯉業は仕事としては引退したが、趣味として続けるつもりである。前年から今年にかけて池を8~9面ほど作る予定であり、これから鯉を飼い始める予定である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・被災後、養鯉業はたたみ、息子世帯とも世帯分離 ・農協の建物更生共済には、以前加入していたが地震直前に解約していたため補償が受けられなかった。

バリアフリー化されており住宅内での移動は安心できることや台所回りの使い勝手の良さ、さらには、当初評価が低かった吹き抜け部分の暖房効率の良さなど、現住宅に対する評価が高い側面もある。

6) ケースNo.Y-6さんの世帯

Y-6さん世帯の生活状況に関しては、表7に示した通りである。震災前は養鯉業を営み息子世帯と同居していたが、被災した際に自宅および養鯉池が全壊、生活基盤の全体的な見直しが強いられたケースである。表中記載されていないが、仮設住宅入居時に世帯分離がされ、Y-6さんは夫婦で居住、息子家族は別の住宅に居住することになった。さらに、震災前に農協の建物更生共済を解約していたこともあり、住宅の再建資金が十分確保できない等の理由から、山古志地区に戻って以降、親世帯は公営住宅居住、子世帯は住宅を新築再建という方法を選択した。公営住宅の入居に当たっても、前年度の所得があったため当初は入居要件に抵触したが、行政との交渉の結果入居が実現した。山古志に戻ってから、生業としての養鯉業は廃業したが、趣味として続けていくため池の整備に着手している。

3. 山古志地区外居住を選択した世帯
に対するヒアリング調査の結果

3.1 調査対象者の属性

調査対象4世帯の属性は表8に示した通りである。世帯人員数が4名が2世帯、6名と2名がそれぞれ1世帯である。現在の住宅は全世帯が所有、住宅の再建状況は、既存住宅の購入および新築がそれぞれ2世帯である。被災の状況は、「全壊」が3件、「半壊」が1件である。以下、それぞれの世帯の山古志地区へ戻ってからの生活状況を報告する。

表8 調査対象世帯の属性（山古志地区外居住者）

ケースNo	No.O-1	No.O-2	No.O-3	No.O-4
世帯人数	4人	4人	6人	2人
現住宅への入居時期	H16.12月	H18.8月	H17.10月	H18.6月
住宅の所有状況	所有	所有	所有	所有
住宅の構造	木造戸建	木造戸建	木造戸建	木造戸建
再建の状況	既存	新築	既存	新築
被災状況	全壊	全壊	全壊	半壊
保険の加入状況	JA建更	JA建更・農民共済地震保険	加入なし	JA建更
被災前住宅の所有状況	所有	所有	所有	所有
被災前住宅の構造	木造戸建	木造戸建	木造戸建	木造戸建
被災前住宅の部屋数	4部屋+7居間	9~10部屋+居間・食堂・台所・浴室・便所	3部屋+7居間	8部屋+居間・食堂・台所・浴室・便所

3.2 調査対象世帯の生活状況

1) ケースNo.O-1さんの世帯

O-1さん世帯の生活状況に関しては、表9に示した通りである。震災によって自宅が「全壊」と同時に、世帯主は震災直後脳梗塞で倒れ半身不随の状態になってしまう。居住していた木籠地区では、全ての住宅が水没しコミュニティ再生の目処が付かなかったため、比較的山古志に近い、長岡市近郊の滝谷町に既存で売りに出ている現在の家を求めた。世帯主は脳梗塞の後遺症により、身体障害者手帳1級を取得、手すりなどにつかまれば移動できるが、平時は車いすを利用している。介護保険からは、週2回の巡回入浴および週1回の訪問リハビリテーションを受けている。震災後人的な交流や地縁の面で山古志での暮らしとの連続性はあまり確保されていない。

2) ケースNo.O-2さんの世帯

O-2さん世帯の生活状況は表10に示した通りである。被災前は山古志で酪農を営んでいたが、震災により自宅および牛舎が全壊し、その直後柏崎市に住む酪農仲間の助けを得て、即座に山古志地区外への転居を決めた事例である。転居先の柏崎では自宅を新築し、引き続き酪農を営んでいる。居住地が山古志から離れてしまったが、世帯主と山古志居住時の友人との関係は続いており、よく酒を交わす仲である。現居住地でも近所付き合いはあるが、山古志時代の友人ほど濃密なものではないそうである。また、自宅近所に畑を借りており、家族で食べる野菜などを栽培している。

3) ケースNo.O-3さんの世帯

O-3さん世帯の生活状況は表11に示した通りである。世帯主は、震災前から糖尿病による網膜剥離症を患っており、車の運転が出来ない状況にある。被災した際、自宅は「全壊」の被害を受けた。子供世代のことや自分自身の病を考慮し、長岡市内への移転を決意し既存住宅を購入した。立地は通院している総合病院への利便性が良い場所である。市内へ越してからはこれまで別居していた長女と三女も同居をはじめた。長岡市内への移転により、病院への通院が便利になった一方、世帯主自身は車を運転できないため、一人で山

古志を訪れることがかなわず不満を募らせている。住宅の再建にあたっては、以前、農協の建物更正共済に加入していたが、糖尿病を患った際に解約してしまい補償は無かった。

4) ケースNo.O-4さんの世帯

O-4さん世帯の生活状況は表12に示した通りである。震災前より息子世帯は長岡市内に暮らしており、住宅の被災状況は「半壊」であったが、震災をきっかけとして長岡市の子世帯の隣に家を新築したケースである。自宅は、かつて山古志住民が仮設住宅生活を送っ

表9 No.O-1さん世帯の生活状況 (インタビュー回答者:世帯主、68歳、男性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	・在来木造の住宅(所有)に家族3人で暮らす。 ・住宅の平面は、4居室+居間・食堂・台所・浴室・便所といった構成である、55坪の広さであった。	・世帯主は、山古志地区内で公務員として勤めていた。車で通勤。 ・妻は運転せず。 ・息子は自家用車で長岡市内に通勤。	・自宅近所の友人と互いの家に入り込む程度の付き合いであった。	・震災前は、山古志村で区長(公務員)を務めていた。 ・震災直後、地区住民の仮設への入居の対応をしていたが、その終了後脳梗塞で倒れた。	・世帯主は市役所勤務 ・長男は長岡市内のIT企業に勤務。
現在	住宅の被災状況:全壊 ・木籬地区にあった住宅は水没し全壊と認定された。 ・平成16年12月、不動産屋の紹介で、滝谷町の既存の戸建住宅を購入。 ・居室数7部屋+居間・食堂・台所・浴室・便所で構成されている。	・世帯主は、震災直後脳梗塞で倒れ半身不随となり、現在は運転できない。 ・家族の中で運転できるのは息子のみ。 ・現住宅は滝谷駅前に立地しているため電車・バスの便など利用できる。 ・山古志に農地を残してきたが、現在は使用せず、畑仕事は行っていない。	・現在の居住地においても、近隣に2~3人親しい知人がいる。互いの家に入り込む程度の付き合いである。 ・世帯主が倒れてから積極的な交流はなくなった。長男も山古志住民との繋がりはあまりない。 ・妻は、今でも山古志に2~3軒交流のある人はいるが、特に用がなければ行かなくなった。	・仕事は65歳の時に定年退職した。 ・脳梗塞の予後でリハビリを実施しているが、半身不随が残っている。手すりに捉まれば階段も上れるが、平時は車椅子を使用。 ・障害者手帳1級を所持。 ・現在は妻、長男が介護にあっている。 ・福祉サービスの利用に関しては、週2回巡回入浴車が訪れ、一日、食事・入浴、リハビリなどの介護を行う。	・世帯主および妻は年金生活。 ・長男は長岡市内のIT企業に勤務。 ・農協の建物更生共済に加入しており補償を受けた。

表10 No.O-2さん世帯の生活状況 (インタビュー回答者:世帯主、52歳、男性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	・在来木造の住宅(所有)に家族5人で暮らす。(世帯主夫婦と世帯主の両親、次男) ・住宅平面は、9~10居室+居間・食堂・台所・浴室・便所で構成されており、80坪程度の広さ、その1/3は作業所として使用していた。	・世帯主は山古志の自宅で酪農(乳牛)に従事。 ・次男は長岡市内へ会社員と車で通勤。 ・世帯主の母以外は全員車を運転。 ・買い物は週末に小千谷のスーパーへ車で行きまとめ買いしていた。 ・週2回ほど地区内に移動販売車が巡回。		・震災前は、山古志の自宅で乳牛の酪農を行っていた。 ・世帯主の母親は宮内の病院で定期健診を受けていた。	・世帯主は酪農業を経営。 ・次男は長岡市内で会社員として勤める。
現在	住宅の被災状況:全壊 ・自宅全壊のため、震災4日後に酪農仲間がいる柏崎市に新築の家の建設を始める。 ・住戸平面は8居室+居間・食堂・台所・浴室・便所で構成されている。65坪程度の広さ。 ・柏崎へ移り、会社員の次男とは世帯分離、かわりに三男が同居をはじめた。	・現在の家の近くに2~3畝の畑を借りており、毎日家で食べるようなものを栽培している。 ・山古志地区に田を残してきたが手付かずのままである。 ・現在、妻がパートをしているスーパーで買い物をする。	・新しい住宅の近隣の人とは仲が良いが飲み仲間ほどではない。 ・妻の母が2~3件先に住宅を新築した。頼りにしている。 ・飲み仲間は依然として山古志時代の友人(よした一山古志のメンバー)	・震災後、酪農仲間を頼り、柏崎で再開。	・世帯主は酪農業を経営。 ・農協の建物更生共済および農民共済の地震保険から補償金の給付を受けた。

表11 No.O-3さん世帯の生活状況 (インタビュー回答者:世帯主、64歳、男性)

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	・在来木造の住宅(所有)に家族4人で暮らす。(世帯主夫婦、次女、次女の息子) ・住宅平面は、3部屋+居間・食堂・台所・浴室・便所	・世帯主は糖尿病による網膜剥離症を患っており、車は運転できない。移動にはタクシー・バスを利用。 ・妻・次女は車を運転する。 ・買い物は仕事帰りの妻が週2回程度買い物をするのに加えて、移動販売車を利用。	・山古志地区外に暮らす長女(小千谷)および三女を頼りにしていた。	・震災前は、バスなどで長岡へ通勤していた。 ・長岡市内の中央総合病院で定期健診を受けていた。	・世帯主は長岡市内で自動車販売業の営業に勤める。
現在	住宅の被災状況:全壊 ・子供達のことや、世帯主の持病のことを考え、総合病院に近い現在の居住地(長岡市内)に転居を決めた。 ・住戸平面は5部屋+居間・食堂・台所・浴室・便所。 ・長岡に越してから、長女と三女も同居を開始し6人世帯となる。	・世帯主は糖尿病による網膜剥離症を患っており、車は運転できない。移動にはタクシー・バスを利用。 ・妻・長女・次女・三女は車を運転する。 ・買い物は自宅近所のスーパーを毎日利用。	・現在も山古志に居住している妻の両親との付き合いは続いている。 ・世帯主本人は移動できないので、山古志へ行けないことに不満を持っている。	・世帯主は現在退職し自宅を過ごしている。 ・長岡市内の中央総合病院で定期健診を受けていた。	・世帯主は退職。 ・妻と長女が介護ヘルパーとして勤務。 ・以前、農協の建物更生共済には加入していたが、病気を理由に解約、その直後に被災した。

表12 No.0-4さん世帯の生活状況

（インタビュー回答者：世帯主、66歳、男性）

	物的環境		人的環境	社会的環境	経済的環境
	住環境	道路、交通手段、商業施設等インフラ			
被災前	<ul style="list-style-type: none"> ・在来木造の住宅(所有)に夫婦2人で暮らす。 ・住宅平面は8部屋+居間・食堂・台所・浴室・便所。 ・息子家族は長岡市内に居住。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は長く役所に勤め、退職後は養鯉業を行っていた。 ・世帯主・妻ともに車の運転をする。 ・買い物は農協を利用したり、長岡へ出かけたりしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長岡に暮らす息子を頼りにしていた。 ・互いの家上がりこむ程度のつきあいの友人はいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は車で通勤 ・病気などの時には、山古志診療所に通院していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は公務員
現在	<ul style="list-style-type: none"> 住宅の被災状況：半壊 ・息子家族が長岡市内に暮らしており、いつか山古志をでなければならぬと考えていた。 ・息子の家の隣(陽光台)に、一戸建ての住宅を新築、住戸平面は4部屋+物置である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主・妻ともに車の運転をする。 ・自宅近所に山古志出身者3人で畑を借りている。ここでは、ジャガイモ、サツマイモ、枝豆、かぼちゃなどを栽培している。畑仕事は世帯主のみ。自宅の庭先でもトマト・きゅうりを栽培。 	<ul style="list-style-type: none"> ・息子家族とは隣居。 ・現在親しくしている友人は、陽光台に来てから知り合った。陽光台には山古志出身者が8名ほど暮らしている。土地が50年の借地契約であり、比較的安価に自宅を再建できたことや、近所に公園がありがたみを感じていることから、この土地を選んだ。 ・山古志に親しい友人はいるが、次第に足が遠のいている。現在は墓参りで訪れる程度。まだ、山古志に池を持っているが、そこは、現在真鯉を飼う人に貸している。 ・一方、養鯉関係の仲間との付き合いは続いている。さらに、大久保から舞やっているので、祭りなどのイベントに出向くことはある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主は現在、アルバイトで運転手を勤めている。 ・妻も病院へパートに出ている。 ・世帯主は、月1回長岡市内の病院へ通院。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世帯主、妻ともにアルバイト・パートによる収入 ・農協の建物更生共済に加入しており、補償を受けた。

た陽光台に位置しており、この地区には山古志出身者が8名ほど移住している。現在、自宅近所に山古志出身者3名とともに畑を借り、ジャガイモ・サツマイモなどを栽培している。この友人とは、陽光台での生活をはじめから知り合った。山古志地区にも親しい友人はいるが、時が経つにつれて足が遠のいている。震災前には養鯉業を営んでいたが、養鯉関係の仲間との付き合いは現在でも継続している。

4. 考察

4.1 被災前後での生活の変化

ケーススタディ調査対象者の被災前後での生活の変化に関してポジティブな側面とネガティブな側面をまとめたものが表13である。

山古志地区居住者の生活において、ポジティブな側面・変化として抽出された出来事は、大きく2つあげられる。第一に、長年この地域で暮らしてきた高齢者が、2～3年間の仮設住宅居住時に体調を崩し、生きる気力を失い寝たきり等の状態になっていたが、山古志地区へ戻り、農作業を再開したり以前からの知人に囲まれた生活を再開することによって、生きる力を取り戻したことがあげられる。「故郷」に対する愛情・

愛着が、瀕死状態となった者の生命力を回復させた事例であり、長年住み続けた場所に戻ることの重要性が伺える。第二に、被災によって損傷を受けた自宅の改修・新築後の評価である。改修の事例においては、耐震補強を実施したことによる安心感が、新築事例においては、バリアフリー化やユーザビリティが考慮された台所設備機器、暖房効率の良さなどがあげられていた。

図2は、ケースNo.Y-5さん宅平面図である。この家は、復興モデル住宅に設計変更を加え建設された。当初は、「吹抜け部分は冬寒いのでは」「廊下が狭い」など不満な部分を指摘していたが、入居後日が立つにつれて、この住宅に対する評価は高くなっていった。また、図3はケースNo.Y-6さん宅平面図である。この家は、復興モデル住宅の計画を取り入れた公営住宅であるが、Y-5さん同様、新しい設備、バリアフリー仕様、吹き抜けによる暖房高率の良さが評価されていた。

一方、ネガティブな側面は、公共交通網の未整備、商業施設の不在、転出者との関係の希薄化などがあげられている。

地区外居住者の生活においてポジティブな側面・変化として抽出された出来事は1つあげられる。生活の利便性の向上であり、商業施設・病院・福祉サービスなど生活上の様々なアメニティへのアクセスの良さを指摘する声が多い。また、自宅近所の畑を借り、山古志時代と同じように農作業を行っている状況も伺

れた。

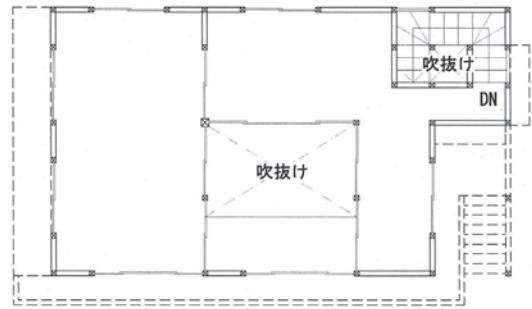
一方、ネガティブな側面は、故郷である山古志地区および山古志地区住民との関係の希薄化があげられていた。新しい居住地での生活に慣れていくに従い、山古志地区への足が遠のいていく状況が明らかになった。

表13 調査対象者の生活の変化

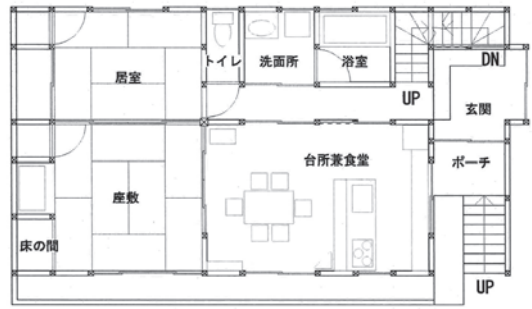
ケースNo.	環境	ポジティブになった側面・変化	ネガティブになった側面・変化	
山古志地区居住者	No.Y-1	物的	孫の通学手段 居住地区内の商店の閉店	
	No.Y-2	物的	住宅の耐震補強の実施 母(83歳)が山古志に戻り畑仕事を再開したことにより復調	
		人的	親類が山古志より転出 親類の足が遠のく 母の友人が転出し付き合いが狭まる 世帯主の失業・転職	
	No.Y-3	経済的	母(94歳)が山古志に戻り復調	被災後家の中は混乱したまま 自宅近所の商店の閉店 介護保険を利用するが、介護の負担が依然として大 地区外への転出者増による患者数減少
		社会的		
		経済的		
No.Y-4	物的		工務店経営のため自宅の改修には手が回らず 居住地区内の商店の閉店	
	人的		若い世代の転出者が多くコミュニティ運営が困難に	
No.Y-5	物的	復興モデル住宅のBF化、台所の使い勝手等は評価 吹き抜け部分の暖房効率も評価	住宅再建にあたり、支払いトラブルあり 住宅の造作や建材に不満あり 養老業の廃業により外出頻度減 路線バスが復旧せず、コミュニティバスの本数も少ない 養老池の全壊により養老業廃業 年金生活となる	
	社会的			
	経済的			
No.Y-6	物的		家が全壊、息子世帯と世帯分離し公営住宅に入ることになる	
	人的		親しかった縁家屋は転出	
	社会的		養老池の全壊により養老業廃業	
地区外居住者	No.O-1	物的	住宅は全壊・水没したため滝谷町へ転居、既存住宅購入 震災直後、病気により運転が不可能 山古志の知人との交流減少 年金生活となる	
		社会的	病気予後のため福祉サービス利用	
	No.O-2	物的	住宅は全壊、震災直後に柏崎への転居を決め、自宅を新築	
		人的	自宅そばに畑を借り野菜を栽培 山古志時代の友人との関係は継続 現自宅近隣の人は手付かずのまま、現自宅近隣の人は親しくない	
	No.O-3	物的	自宅から病院への通院が容易に 現自宅近所にはスーパーはあり、買物の頻度が上がる	住宅全壊、闘病のため通院への利便性を考え、長岡に転居
		人的		一人で山古志へ行けないため知人に会えない 震災前に建更共済を解約したため住宅再建資金が不足
	No.O-4	物的	震災を期に、息子家族の暮らす長岡へ転居。 息子世帯との近居が実現 自宅そばに山古志出身者とともに畑を借り野菜を栽培	震災により半壊の被害を受ける。
		人的	山古志の養老関係者との付き合いは継続	山古志時代の友人との関係は希薄に
		社会的	医療サービスを受けやすい環境に	夫婦ともに非正規雇用

4.2 中山間地の居住継続の要因とは

長岡市山古志地区という1地区の事例を通しての考察であるが、今回の調査から、長年住み慣れた中山間地での生活は、高齢者にとっての生きがいに成り得ることが明らかになった。一方、山古志地区外に移転し



2階平面図



1階平面図

図2 ケースNo.Y-5の自宅平面図



図3 ケースNo.Y-6の自宅平面図

た者は、生活の利便性の高い市街地に暮らしながら畑仕事を行うなど山古志時代との生活スタイルの連続性をはかる一方、次第に希薄化していくコミュニティとの関係性を憂いでいた。山古志地区での調査から、その生活の断絶(=地区外への転居)をふせぐためには、インフラの整備が重要課題である状況が明らかになっ

PROJECT 2

た。公共交通網や商業施設の整備、福祉や医療サービスの確実な提供、こうした生活の諸条件が整備されてはじめて、中山間地での生活の継続が確保されるのである。

5. おわりに

本研究は、震災により地域コミュニティの再構築を強いられた、中山間地としては特殊事情を有する地区での調査結果をまとめたものである。今後は、その他の地域での調査研究を重ね、中山間地居住に必要な条件の抽出に努めていきたい。

【注】

- 1) 設計者は設計変更の割には安価であると自己評価している。

【参考文献】

- 1) 南博文編著：環境心理学の新しいかたち、第9章被災者の住まいへの働きかけから考える心と環境、pp240-273、誠信書房、2006.3
- 2) 長岡市：中山間地の住まいづくり手引書—山古志をモデルケースとして、2006.3

【研究協力者】

- | | |
|--------|-------------------|
| 内田 雄造 | 東洋大学ライフデザイン学部・教授 |
| 上杉 啓 | 東洋大学工学部・名誉教授 |
| 古賀 紀江 | 前橋工科大学工学部・准教授 |
| 神吉 優美 | 東洋大学ライフデザイン学部・准教授 |
| 二瓶 俊介 | 一級建築士 |
| 小林 健一 | 国立保健医療科学院・主任研究官 |
| 青柳 聡 | 東洋大学大学院生 |
| 関 正樹 | 東洋大学大学院生 |
| 杉田 雅之 | 東洋大学大学院生 |
| 鈴木 由美子 | 前橋工科大学学部生 |
| 金 明鎬 | 前橋工科大学大学院生 |